研究 No. 0811

# 建築家・内田祥文の「國民住宅」構想に関する研究

主査　竹内　孝治*1
委員　小川　英明*2，　小田　達郎*3，　今村　太朗*4

本研究は，戦時期日本において活躍した建築家・内田祥文の「國民住宅」構想を対象として，設計提案および思想内容の読解を通して歴史的意義を明らかにするものである。まず，内田の経歴および建築活動を概観し，内田が建築競技設計において提案した「國民住宅」案の内容を整理した。次に，「國民住宅」案に関連して発表された諸論考の内容読解により，科学性・合理性と日本精神の称揚が併存した内田の思想内容を明らかにした。また，計画案の図面内容の検討およびＣＡＤによる３次元復元により，内田の「國民住宅」提案にみられる，モダニズムの手法と日本文化の融合がもたらした歴史的意義を明らかにした。

**キーワード**：1）内田祥文，2）國民住宅，3）近代の超克，4）モダニズム，5）ナショナリズム，6）日本精神，7）競技設計，8）戦時期日本，9）３次元復元

# YOSHIBUMI UCHIDA'S PHILOSOPHY OF "KOKUMIN-JYUTAKU"(NATIONAL HOUSING)

Ch.　Kohji Takeuchi
Mem.　Hideaki Ogawa,　Tatsuro Oda,　and　Taro Imamura

This paper aim to evaluate Yoshibumi Uchida's philosophy of architectural design. The discourse and Kokumin-jutaku architectural designs of Uchida, who was active during the war in Japan, were examined. After surveying Uchida's career and activities, we found that Uchida discussed his philosophy both from spiritual viewpoint and from a physical viewpoint. Secondly, his philosophy on architectural design was mainly founded on the notions on 'rationality,' 'science,' 'modernity' and 'Japanese spirit'. Finally, we concluded that his philosophy and design for Kokumin-jyutaku was oriented toward a synthesis of a traditional Japanese system of society and family and new international architectural scheme.

## 1.　はじめに

### 1.1　研究の背景・目的

1940 年代前半の日本において積極的な議論がなされた「國民住宅」は，いわゆる新体制宣揚の機運と歩調を合わせ，厚生省や建築学会，住宅営団等の諸機関のみならず数多くの建築家等によっても提言・提案がなされた。当時，建築界において「コンペの天才」と称された建築家・内田祥文(1913-1946)もまた「國民住宅」に関する提案および論考を精力的に発表している。従来こうした「國民住宅」については，真に日本的な住宅を希求しながらも，結果的に住宅の国民生活最低基準を定め，総動員態勢を扶翼するに至った国策的住宅として否定的な歴史評価がなされており，内田の提案に関しても，戦時に量産された不毛な提案として一括されるか，新進作家の非現実的作品として顧みられていない[注1)]。

しかしながら，「國民住宅」はナショナリズムの高揚に伴い重要な建築課題として議論されてきたことが知られており、戦時の建築思潮を問うに適した研究対象とみなせるのみならず，内田が構想した「國民住宅」が競技設計での入選、論考の雑誌連載等，当時の建築界で好意的に受容され多くの発言が許容されたことを勘案するならば，構想の実現可能性や後世への影響の検証といった視点だけでなく，そこに見出される建築思想・提案の諸相を析出することで，戦時期の住宅計画にみられた傾向を社会との思想的連関の相のもとにおいて考究する好個の対象と見なし得る。

そこで本研究は，戦時期日本において浮上した建築課題が持つ意味・意義を考究する端緒として，建築家・内田祥文の「國民住宅」構想を対象に，戦時期日本の社会的・思想的課題と対峙するかたちで打ち出された構想の内容を考定し，その思想の内実を論ずる。これにより，「國民住宅」が孕む問題構成の一端を明らかにし，日本近代建築史における内田の「國民住宅」構想が持つ意味と歴史的意義の同定を企図する。

*1 愛知産業大学造形学部建築学科・講師　*2 愛知産業大学大学院造形学研究科建築学専攻・教授　*3 アールアンドコス設計工房
*4 (株) 小林清文建築設計室（当時　愛知産業大学大学院造形学研究科　大学院生）

### 1.2　研究の方法と本論文の構成

内田祥文の「國民住宅」構想の具体像は，まず競技設計案として提案されたことからも，現実的な諸条件に縛られずに，より設計理念・思想が前面に開陳された設計提案として読解することが可能と思われる。また「國民住宅」に関連し発表された内田の諸論考は，競技設計案である戸建住宅に止まらず，その背景にある思想的・理念的背景にまで踏み込んだ内容となっているばかりでなく，住宅地から地域，国土計画に至るまでを射程に収めた「國民住宅」構想ともいえる内容であることからも，「國民住宅」を鍵として戦時期日本における建築思想の一端を考究するに好個の対象と考えられる。

以上の考えに基づき，本研究では前節で示した企図を達するため，内田による「國民住宅」関連論考の内容読解と設計提案の内容分析の２面から考察を進める。まず，内田祥文の経歴および建築活動を概観し（２章），内田と「國民住宅」の関係性を，当時の建築界の状況や建築学会主催競技設計の経緯，内田が「國民住宅」に関連して発表した論考について概要を整理する（３章）。次に内田の「國民住宅」関連論考の内容読解（４章）および，競技設計へ応募・入選した「國民住宅」案の内容分析を図面の読解および建築ＣＡＤによる３次元復元により進める（５章）。以上の内容を踏まえ，内田の「國民住宅」構想の内実を明らかにし，日本近代建築史における史的評価を行う（６章）。

## 2.　内田祥文の経歴および建築活動

### 2.1　経歴

内田祥文の経歴や業績については，彼が戦後すぐ夭折したこともあり，包括的な記録・記述はみられない[注2)]。まず本章では内田の著書・論文のほか近代建築史関連文献を整理し，内田の経歴および建築活動を概観することにより，以降に行う思想内容の考定と，論考および設計提案の内容を考察するための基礎的知見を得たい。

内田祥文は 1913 年に父，内田祥三(1885-1972)の長男として生まれた。周知のように祥三は建築構造学の大家としてだけでなく，住宅政策，都市計画においても精力的に活躍した人物であり，後の祥文の関心は，この父の存在が大きく影響したものと考えられる。将来を嘱望されながらも，過労がたたり，1946 年３月に日本大学研究室で研究に従事中発病。同月 26 日，日本大学附属病院にて死去した[注3)]（表 2-1）。

内田の建築活動は，享年 33 才という短命さにも関わらず実作に恵まれることはなかったものの，建築設計案，著作・論考を多岐にわたり提案・発表している。広範な領域におよぶ内田の活動を，以下では研究活動，設計活動，教育活動，評論活動，その他の活動の順に整理・概観しておく。

表 2-1　内田祥文略年譜

| 和暦 | 西暦 | 月 | 事項 |
|---|---|---|---|
| 大正　2 | 1913 | 10 | 東京市麻布区新龍土町12番地に父内田祥三、母みね子の長男として生まれる。 |
| 昭和　13 | 1938 | 3 | 東京市麻布尋常小学校、開成中学校、日本大学予科を経て、日本大学工学部建築学科を卒業。 |
| | | 4 | 東京帝国大学工学部大学院に入学。岸田日出刀、濱田稔教授指導の下に「建築計画特に防火に関する研究」に専念する。 |
| | | 6 | 建築学会の「既存木造家屋外周の防火構造及びその施工法考案」の懸賞競技に応募。第一種は当選し、第二種は佳作となる。 |
| | | 9 | 晋北自治政府の招聘により、大同の都市計画設計に参加。奉天、北京、張家口、大同、熱河、新京、ハルビン、吉林等に旅行する。 |
| | | 10 | 建築学会主催建築展覧会競技設計「青年道場設計図案」に応募。佳作。 |
| 昭和　14 | 1939 | 10 | 建築学会主催建築展覧会競技設計「勞務者向集團地住宅地計畫案」に応募。一等に当選。 |
| 昭和　15 | 1940 | 9 | 建築学会主催建築展覧会競技設計「家族向アパートメント・ハウス計畫案」に応募し、佳作となる。 |
| | | 8 | 論文「家屋外周の防火に關する研究」(建築雑誌) |
| 昭和　16 | 1941 | 1 | 「新しき都市―東京都市計畫試案」の都市計画展を東京銀座の紀伊國屋で行う。 |
| | | 4 | 新建築・新しき都市特集號 |
| | | 8 | 論考「庶民住宅覺書」（住宅） |
| | | 10 | 建築学会主催建築展覧会競技設計「國民住宅圖案」に応募。一等に当選。 |
| | | 10 | 住宅営団研究部嘱託として住宅研究を行う。 |
| | | 12 | 論文「木造家屋の火災時に於ける對隣壁面の温度に就いて」（建築学会論文集） |
| | | 12 | 太平洋戦争勃発 |
| 昭和　17 | 1942 | 1 | 東京帝国大学工学部講師に就任。 |
| | | 1 | 論考「國民住宅研究」（住宅）、以後全９回にわたり不規則連載。 |
| | | 4 | 東京帝国大学第二学部講師に就任。建築設計製図の指導に当たる。 |
| | | 4 | 小冊子「建築と学校製図」 |
| | | 5 | 日本生活科学会学術委員に就任。最小限住宅の研究に従事。 |
| | | 10 | 小冊子「構造計算概要」 |
| | | 11 | 大島親貞の長女晴子と結婚。 |
| | | 12 | 著書『建築と火災』（相模書房） |
| 昭和　18 | 1943 | 4 | 東京帝国大学第一工学部大学院を満期退学。 |
| | | 9 | 日本大学講師となり、都市計画と建築設計製図の指導に当たる。 |
| | | 11 | 論考「建築集団の一体的計画」（私家版） |
| 昭和　19 | 1944 | 1 | 長男祥之が生まれる。 |
| | | 5 | 建築学会より昭和19年度学術賞を授与。 |
| | | 10 | 内閣より戦時研究員に任命。セメント代用土の調査・研究に当たる。 |
| 昭和　20 | 1945 | 8 | 終戦。 |
| | | 10 | 東京帝国大学第一工学部教授会の議を経て、工学博士の学位を授与される。 |
| 昭和　21 | 1946 | 1 | 日本大学工学部教授に就任。建築構造、都市計画、建築設計製図の指導に当たる。 |
| | | 2 | 日本学術振興会学術部第26特別委員会研究嘱託。最小限住宅に関する研究に従事。 |
| | | 3 | 東京帝国大学文教地区計画委員会幹事、および東京帝国大学助教授に就任。 |
| | | 3 | 東京都商工経済会主催帝都復興計画図案懸賞募集に参加。「深川中小工業地区」、「新宿歓興地区」両計画案を提出し、共に一等に当選。特に前者に対しては特賞を授与される。 |
| | | 3 | 25日夜、日本大学研究室で研究に従事中発病。翌26日、日本大学附属病院にて死去。 |
| 昭和　22 | 1947 | 11 | 論考「理想都市」（『計画planning建築文化の基本的問題』所収。） |
| 昭和　28 | 1953 | 3 | 著書『建築と火災』の改訂版が出版。生前に加筆修正を加えていたもの。 |

## 2.2 建築活動

1)研究活動

東京帝国大学工学部大学院に入学後，岸田日出刀，濱田稔教授指導の下に「建築計画特に防火に関する研究」に専念した。その研究成果は多くの学術論文のほか[注4)]，著書『建築と火災』(1942)[文1)]としてまとめられている。さらには建築学会より学術賞を授与され，終戦後には東京帝国大学第一工学部教授会の議を経て，学位請求論文「木造家屋外周の防火に関する実験的研究」により工学博士の学位を授与された。その他にも，建築学会主催「既存木造家屋外周の防火構造及びその施工法考案」懸賞競技に応募。第一種は当選し，第二種は佳作となるなどの快挙を遂げている。

こうした事実からも，内田の経歴において建築防火に関する業績は重要な位置を占めるものと目されるが，実際には高山英華(1910-1999)が，祥文が「戦争中防災やらされちゃった，学位取るために」と述懐し，防火研究が消極的な動機によると指摘するなどの証言もある（高山，前掲書，p68）。なお，没後の1953年，生前の加筆修正を踏まえ改訂・増補された『建築と火災（改訂版）』[文2)]が出版された。

2)設計活動

内田の建築設計活動は，父・祥三や高山英華とともに行った中国大同の都市計画(1938)を皮切りに，精力的に活動される[注5)]。特に名を知らしめたのは，競技設計への数々の入選である。年一回開催される建築学会主催建築展覧会競技設計では，「青年道場（佳作）」(1938)，「勞務者向集團地住宅地（一等）」(1939)，「家族向アパートメント・ハウス（佳作）」(1940)，「國民住宅（一等）」(1941)と毎年入選を果たした。終戦後の1946年には，東京都商工経済会主催帝都復興計画図案懸賞募集に，「深川中小工業地区」および「新宿歓興地区」の両計画案を提出し，共に一等に当選。特に前者に対し特賞を授与された[注6)]。

その他，内田祥文を中心に，佐川正，楠瀬正太郎，市川清志，富田陽一郎，谷内田二郎，浜口美穂ら参加のもと計画・提案した「新しき都市」(1941)と題した都市計画展を東京銀座の紀伊國屋で行い，その内容は同年4月に「新しき都市—東京都市計畫試案」として『新建築』誌にも掲載された[文3)]。掲載にあたって序文を寄せた坂倉準三は，計画案をしなやかな感性による「小供の計畫」として称賛している。

このように1930年代後半から1940年代前半にかけて精力的に設計提案を行った内田祥文の活動について，後年，高山英華は祥文の才能を惜しみつつ「丹下（健三）くんよりうまいかもしれないよ」と回顧し，伊藤ていじも「建築デザインの天才」と評している[注7)]。

3)教育活動

東京帝国大学大学院を卒業した後，日本大学および東京帝国大学等において，都市計画，建築設計製図，建築構造の教育・指導に当たった。東京帝国大学で用いた設計製図用小冊子「建築と学校製図」(1942)は設計製図教育の副読本として作成されたものであり，建築家という職能や製図の本質などが丁寧に語られていることからも，内田の建築観をうかがえる格好の資料といえる。

この他，各種構法別の構造計算方法について略述した小冊子「構造計算概要」(1942)も作成しており，精力的に教育指導にあたっていた姿が偲ばれる[注8)]。

4)評論活動

「國民住宅」に関連した内田の論考は，よく知られる「國民住宅に就て」[文4)]のほか，「國民住宅研究」と題した全9回におよぶ雑誌連載[文5～13)]や「庶民住宅覺書」[文14)]の計11編を数える。また，競技設計に付随して『都市公論』へ発表した「勞務者向集團住宅地計畫に就いて」[文15)]などの建築評論を著している。

没後に発行された日本建築文化連盟による『計画planning 建築文化の基本的問題』[文16)]では，「理想都市」と題した理想都市の歴史を回顧する論考も著している他，ピカソとコルビュジエ，ストラビンスキーを論じた芸術評論，中国旅行や原爆投下直後の広島への視察をもとにした紀行文も投稿している[注9)]。

5)その他の活動

1941年より住宅営団研究部嘱託となり住宅研究を担当。「國民住宅」懸賞競技設計入選と時期を同じくしており，住宅という建築課題への傾斜が窺われる。1942年には父・祥三が会長を務める日本生活科学会の学術委員に就任し最小限住宅の研究に従事している[注10)]。この他，建築学会「庶民住宅の技術的研究」へも臨時委員として参加し，近隣住区理論に基づく図面を作成している[注11)]。戦争が本格化すると内閣より戦時研究員に任命され，セメント代用土の調査・研究に当たった。終戦後，日本学術振興会学術部第26特別委員会研究嘱託となり，ふたたび最小限住宅に関する研究に従事している。

## 2.3 内田祥文の「住宅」への関心

内田の経歴および建築活動は当時の時代背景を色濃く反映したもので，労務者住宅，最小限住宅，建築防火等が重点的に採り上げられている。住宅に関する研究・論考が大半を占め，総じて住宅に関する問題提起と，解決策の模索であった。特に当時の情勢を受けて住宅のありかたを模索する「國民住宅」に関する評論・設計は，建築学会主催の競技設計への入選に前後して，積極的な発言・提案がみられることが特筆される。こうしたことか

らも，内田の建築・都市計画思想を評価するためには，彼の「國民住宅」を一つの手掛かりとして考究することの重要性が確認される。

## 3. 内田祥文と「國民住宅」

### 3.1 戦時期日本における「國民住宅」

「國民住宅」[注12]は，戦時期日本における新体制宣揚の機運と歩調を合わせ，厚生省や建築学会，住宅営団等の諸機関のみならず数多くの建築家等によっても提言・提案された[注13]。そこで諸提案の内容について，既往研究[注1]を踏まえながら以下に概観しておく。

①「國民住宅」は，戦時下において最優先された耐乏生活を推進するとともに，急進的ナショナリズムの勃興を反映した伝統的意匠・生活様式を採用するものが大勢を占めている。一部は時局便乗と伝統礼賛，質実剛健路線を採り，あるいは，権力による建設と統制と合理化を通じて国民生活向上を試みたが，結果としてファシズムへと回収されたことが指摘される。

②そうした傾向のなか，西山夘三(1911-1994)の著書『住宅問題』(1942)，『國民住居論攷』(1944)などは，戦時下において国家主導のもと切り詰められていく国民生活に対し，基本的な生活の必要条件を維持するために「食寝分離」を提言しており，当時の潮流へのアンチテーゼとして特筆に値する。

③内田祥文による「國民住宅」構想の内容は，住戸提案に止まらず，前提とされる心性の考察に始まり，住宅地計画や国土計画までを包括する内容である。また，発表論考の分量においても群を抜いていることが指摘できる。

例えば『住宅』に全９回にわたって連載された「國民住宅研究」の以下のような目次構成を一瞥すればその事実は理解できる。

1.序説―或る寓話に捧ぐる誅，2.國民住宅觀の確立（2.1.精神的考察，2.2.物質的考察），3.國民住宅の精神と形態，4.國民住宅の誕生すべき世界（4.1.我國古代の氏族制度，4.2.農村の社會），5.国民住宅の在り方に就て（5.1.家と國土計畫との關聯，5.2.位置による規定に就て），6.國民學校住區の構成（6.1.集團住宅の單位と其の發展，6.2.家→隣組住區，6.3.隣組住區→購買住區，6.4.購買住區→國民學校住區，6.5.建方と人口密度），7.我國現代に於ける住宅政策（7.1.問題の觀方，7.2.我國に於ける住宅問題の發生と其の初期の經過，7.3.大正以降昭和初期迄に於ける帝國政府の行つた住宅政策，7.4.住宅問題深刻化の諸原因，7.5.最近に於ける住宅政策，7.6.住宅營團の設立，7.7.將來の住宅政策の方向に於て）。

内田の「國民住宅」に関する提案や論考は，当時数多くあった「國民住宅」論とはいささか趣を異にする内容であったことが窺われる。

### 3.2 建築学会主催「國民住宅」競技設計

内田の設計による「國民住宅」提案は，1941 年に実施の建築学会主催「第 15 回建築展覧會」第３部として公募された「國民住宅」競技設計に応募した内容である。「第 15 回建築展覧會規程」[文18]には以下のように募集要項が記されている。

> １．課題「國民住宅」／２．趣旨　我國將來ノ住宅確立ヲ期待シ特ニソノ意匠，構造，材料ノ上ニ劃期的ナル創案ヲ求ム／３．條件　位置及敷地　都市ノ住居地域ニシテ２割乃至３割ノ空地地區トス　規模及内容　家族數ハ７人ヲ標準トシ日本國民ノ中堅階級ヲシテ健全ナル家族生活ヲ營ムニ足ルモノ，但シ面積ハ凡ソ 130 平方米迄トス　戸建型式　１戸建。

なお，審査員は市浦健，今井兼次，大村巳代治，岸田日出刀，熊谷兼雄，小林政一，坂倉準三，高山英華，谷口吉郎，堀口捨巳，前川國男，山田守，山脇巌が名を連ねており，応募総数 81 作品，うち４点を入賞，５点を佳作とした。内田はこれに入賞を果たした[注14]。

### 3.3 内田祥文の「國民住宅」関連論考

競技設計に前後して，内田は「國民住宅」に関する論考を立て続けに発表している。設計案や論考が発表された経緯を時間軸に沿って整理すると次のようになる。建築展覧会の出品募集記事は学会誌『建築雑誌』の 1941 年６月号に掲載されているが，同年８月に内田は既に雑誌『住宅』において論考「庶民住宅覺書」(1941)を発表している。この論考の掲載事例から推測するに「新しき都市」での調査・提案内容が元になったものと考えられる。内田の住宅への問題意識は競技設計以前から継続していたものと考えられる。その後，選考結果が同年 11 月の『建築雑誌』に掲載され，次いで雑誌連載「國民住宅研究」(1942-1943)が開始されるのが翌 42 年１月。そして翌２月に，「國民住宅に就いて」(1942)が『建築雑誌』掲載となる。

以上の経緯からも，内田の「國民住宅」構想は建築学会主催競技設計に端を発した提案，あるいは，競技設計に付随した提言としてではなく，以前からの思索のもとに提案され，その思索内容が競技設計を通じ「國民住宅」という枠組みを付与されたことから，発展的に試行されるとともに，雑誌連載を通じて建築論，さらには都市計画論へと再編成されていったものと考えられる。

## 4. 内田の論考にみられる「國民住宅」思想

### 4.1 内田による「國民住宅」の概念定義

「國民住宅」に関連して内田の発表した諸論考「國民住宅研究１～９」，「庶民住宅覺書」，「國民住宅に就て」の計 11 編[文4～14]を対象に，内田による「國民住宅」の概念定義を整理・確認しておく[注15]。

内田は自身の「國民住宅」構想を披瀝するに際し，その全容を「國民住宅観の確立」，「國民住宅の精神と形態」，「國民住宅の誕生すべき在り方」等の論題のもとに，古代の氏族制度や農村社会の考察，国土計画，住宅政策など広範な領域にわたり論じている。論考中，「庶民住宅」を「集團的に建設せらるるものの中の１個である」とし，さらに「國民住宅の内容は，そうした庶民住宅をも一部とする，より總括的な國民の住宅を意味する」としている[文6)]。その上で，「國民住宅観の確立」と題して自身の「國民住宅観」を披瀝するにあたり，「精神的考察」と「物質的考察」の２面に分類して論じている。内田は２分類による論述を便宜上の措置であると断りながらも，「即ち過去の建築は精神的部分丈けが異常に重要視させられるに反し，新しい建築は其の物質的側面に重點が置かれると一般に稱せられて居る」[文7)]と指摘していることからも，“精神”と“物質”の二項対立を軸として，過去そして現在の建築を克服する理念の確立を企図したと看取される。求められる「精神」としては，「郷土」，「家族制度の美風」といった鍵語でもって住宅の存立基盤を指し示している。また「物質」では，「合理化」，「科學化」，「經濟化」などの鍵語が見出される。

二項対立の克服という構図は，他にも「東洋思想」と「西洋思想」，「客體的」と「主體的」，「疊式」と「椅子式」など随所にみることができ，総じて二者択一ではなく双方を止揚した地平での新たな価値観創出を理想とする[注16)]。

このような論考の内容を分類・整理していくと，内田の「國民住宅」思想の特質を以下のように記述できる。

①内田は「國民住宅」を応急的な労務者住宅としてのみでなく，「國家」全体の枠組みへの位置づけにおいて考察している。それは，「彼等にとつては，彼等の家が彼等の心であると同様に，彼等の村が，そして彼等の國家が，彼等の心である[注17)]」という農村への肯定的言及に端的に表現されるように，人間の内面から自発的に湧出し成育される生活原理に基づき，同心円状に展開する血縁的，精神的共同体と家族の器たる住宅の照応関係を提起し[注18)]，「國民住宅」を永続的な建築課題として描出している。こうした「住宅」を「國家」へ接続する指向性の例として，内田は次のように言明する。

> 國民住宅と云ふ言葉は，所謂「よい住宅」と云ふ意味とは同一視して使用せられてはならぬであろう。嘗て，「國際建築」と云ふ名稱があり，其の名の下に含まれる一群の住宅が存在し，そしてさうした建築に對しては，それが最もよい住宅の一つであると一般に認めた時代があつた。それは都市計畫に於て，international planning と云ふものが論議せられたのと全く同様に，夫等は嘗ては國家から解散せられる事に依つて成立したもので，もはや今日では，國家から解放せられて居ると云ふ言葉の外に追いやられねばならぬであろう。それは，國家なき經濟を説く如き經濟學が，全く無意味であるのと同様に，國家なき國民住宅を考へる事も全く無意味である事を示すものである。[文4)]

②「國民住宅」の意匠は「日本の傳統を充分尊重」しながらも，早急な「日本精神論」への接続を牽制した，「實践的創造の中にはたらく無限に自由な歴史的發展精神」に基づく伝統理解に依拠することを唱導する[注19)]。

たとえば内田は，「國民住宅は集團的に計畫建築せられ，日本人らしい隣保協同の精神に立脚した，集團住宅地の１戸でなければならぬ」，あるいは「國民住宅は我が家族制度の美風を尊重善導し，健全な家族生活を營ましめる場所でなければならぬ」といったように，極めて保守的・復古的な言明を行いながらも，「國民住宅は新しい時代の機能と生活に即應する國民生活を肉體的に保證するものでなければならなぬ」とし，「構造材料の合理化により大量生産を行ひ，建築の質を向上せしめる事に，建築資材及び勞力の濫費を防がねばならぬ[文7)]」ことを説き，さらには「住生活の副次的作業，就中家事の科學化，簡易化，經濟化を計り，國民生活の清新を期すと同時に，其の餘剰の時間を以て，家族の生活を厚くする様，計畫せられねばならぬ[文8)]」とするなど，合理的・現代的な視点に依拠していたことが読みとられる。

③理想とする起居様式を論ずるに際して，従来からある「疊式」か「椅子式」かの二元論を排し，その両者を発展的に統合した地点において「どちらかと云へば疊式」を提示している[文8)]。

> 私は，國民住宅の生活様式は，椅子式と云ふよりも疊式に近づいて行くものである様に思ふ。尤も，茲に云ふ疊式に近づくと云ふ事は，過去に於て行はれた疊式生活が最良のもので，將來はすべてがその様に成るべきと云ふのでは全くない。即ち，所謂疊式と稱せられる生活様式とは非常に異つた方向－さうした見地からすれば，どちらかと云へば疊式の生活様式に近い様な，方向に，國民住宅の生活様式が向ふべきであると思ふのである。[文4)]

ここで提言されるのは，従来のような畳敷きとは異なり，「必要に應じ任意の場所に移動」できるような可動性を有するもの[注20)]であることから，新たな住生活の姿を模索するものとして特筆される。

④耐乏生活の傾向が強まる当時において，内田は合理的でありながらも，「如何に充分ゆとりのある，如何に豊かな生活環境を造り出したか」を指標として「國民住宅」の建設を提唱していることからも，戦時下にありながら，さらに将来を見通した普遍的提案を目論んだものと指摘できる[文4)]。

しかし，そこで触れられる「豐か」さが，以下のような言明と表裏一体であることも看過できない。

庶民住宅はあくまでも新しい時代の機能と生活に即應する國民生活を保證すべきものであると同時に，集團的に建設されて始めて意味があるもので，それは大東亞建設の指導者たるべき我が民族育成の生活基地として十分豐かなものでなければなりません。[文5)]

### 4.2 内田による文献引用の思想的傾向

対象論考には「國民住宅」構想の理論的位置づけのために内田が行った数多くの文献引用がみられる。これら引用に着目し，言及される文献の書誌情報および言及内容について整理し，内田の思想的傾向について考察する。

論考中の引用文献は，建築学・都市計画学に関するもの[注20)]の他に，高山岩男(1905-1993)，柳田謙十郎(1893- 1983)和辻哲郎(1889-1960)といった哲学者をはじめ，歴史学者の西村精一(1906-1981)，西田直二郎(1886-1964)，経済学者・難波田春夫(1906-1991)，法学者・作田荘一(1878-1973)などの著作にまで及ぶ[注21)]。

これら引用文献について，著者および著書の属性をみると，著者の生年は1880年代から1900年代，著書刊行年は1932年以降に集中しており，内田の論考と同時代の思想であることがわかる。また，哲学者・西田幾多郎(1870-1945)の弟子である高山，柳田をはじめ，和辻，西田，難波田，作田らは総じて各学問領域において日本主義を標榜する面々であり，内田はこれらの思想に依拠しながら自身の「國民住宅」思想を打ち出したものと考えられる[注23)]。単に時局への迎合的な言辞を弄するのであれば，これまでの文献引用をする必要ない。あくまで内田は能動的に自身の「國民住宅」論を上記思想家らの思索と併走して打ち出そうとしたことは間違いない。

内田が引用した論考の内容・概念を分類・整理した上で，そこに見出される思想的傾向について考察していくと，その大要はおよそ以下のように記述できる。

①引用文献は，哲学，歴史学，経済学，法学など広範な分野にわたるが，それらは総じて世界的視野における日本の位置とその特殊性について論ずるものといえる。たとえば内田は文部省による『戰時家庭教育指導要項』を引きながら，以下のように日本の位置づけを説いている。

即ち，そうした思想の根本は，我國に於ける家こそは，我國民の集團生活に於ける最も典型的なる最小單位であり，國民生活の實践的修練は，家の生活に於て第一に成さるべきである。と云ふ事である。即ち，我々は／我國の家の社會的意義／我國の家の國家的意義／我國の家の世界的意義／と云ふ事が眞面目に論ぜられようとして居ることを見逃してはならぬのである。[文14)]

②論考には「日本」，「國家」，「民族」，「郷土」等の語句が頻出し，各論者はこれら語句を用いながら日本の伝統に立脚した機構の創出や，国家的枠組みのもとでの家族制度を推奨している。住居に住まう家族を，郷土や国家へと接続していくこうした姿勢は，難波田を引用しつつ共同体の理想を述べる次のような内田の言明に端的にあらわれている。

我國が，天皇を絶對不動の中心とする血縁的，精神的共同體である事は，我國民の信念として何人も充分に了知して居る所の事であり，從つて，かかる意味に於て，我國の國民住宅を考へる場合に，我々は，我が家族制度を採り上げ，其の美風を活用する様，計畫，建築せねばならぬと云ふ事に對しては異論はなかろう。[文9)]

③当時の困窮した社会の克服には，西洋文明の盲目的な受容ではなく，日本伝統への単なる回帰でもない，真に「日本的なもの」の在り方が希求されている[注24)]。たとえば内田は高山岩男，柳田謙十郎の著作を引用しながら以下のように言明している。

我々の「日本的なもの」とは，唯過去の中にのみあり，之を繰りかへすことによつてのみ現實的であり得るやうな固定的な精神ではない。それは常に未來に向つて，過去を破つて行く現在の實践的創造の中にはたらく無限に自由な歴史的發展精神でなくてはならぬ。[文7)]

### 4.3 論考にみられる「國民住宅」思想

以上までに確認したように，内田の論考にみられる「國民住宅」思想は，伝統主義への短絡を慎重に回避しつつ進取の住居像を提案し，さらに当時の思想潮流を積極的に受容することで，これからのあるべき建築・都市の文脈へと接続した点に特徴を有するものといえる。

そこでは，「國民住宅」を「其の凡ゆる部分に於て，我國家の興隆を目的として思惟され，計畫建築せられねばならぬ」ものとして位置づけられる。また，それが「國民」を対象とするものである以上，「其の技術的に表現せらるる形態は無數」としている[注25)]。つまりは，「國民住宅」の形態は一個の確定されたものではなく，その「國民」の様態により千差万別にあり得るとすることからも，競技設計で示された案は，幾多にも想定される「國民住宅」の一例であると理解される。

上記のような内田の思想内容から看取される歴史的意義は，戦時体制下における耐乏生活への対応や，あるいはナショナリズムの一発現形態とみなされる「國民住宅」の潮流にあって，モダニズムの洗礼を受けた合理的・科学的建築観に依拠した上で，真に日本的な建築創作を実践する視点を提供した点にあるといえる。こうした志向性は，当時の思想界における「近代の超克」にも

認められるものであり，実際に内田が高山岩男や柳田謙十郎らの所論を引用していることからも，建築界においても西洋近代の否定に依る新思想の樹立とそれに基づいた生活の革新が課題であったものと考えられる[注26)]。

## 5. 内田による「國民住宅」設計提案

### 5.1 「國民住宅」関連論考に掲載された図面

前章までの「國民住宅」関連論考にみられる思想読解の成果を踏まえ，内田が競技設計において提案した「國民住宅」案の図面内容を検討し，３次元ＣＡＤによる復元・考察を行う。対象とする図面・資料は前章までと同様に「國民住宅」関連の 11 編の論考とし，そこに掲載された図面を収集・分析する。

掲載された図表は全 73 枚を数え，うち 59 枚は建築・都市計画に関わる平面図，立面図，断面図，透視図，区画図等の建築図面が占める。内田が自身の「國民住宅」構想を論ずるに際し附した図版であるが，それら図面のうち内田が建築学会主催競技設計へ提出した案は，「國民住宅研究２」[文8)]に掲載された５つのみである。その他，谷内田二郎による建築学会主催競技設計出品作や，伊藤鈴男案や，内田祥文，吉川清，伊藤鈴男，谷内田二郎らの共同設計による「勞務者用連續２戸建住宅の計畫」，「新しき都市―東京都市計畫試案」までもが「國民住宅」の例として掲載されている[文5，13)]。

論考中では，これら提案について肯定的評価とともに解説していることからも，内田は比較的寛容に「國民住宅」の形態や方式，方向性を見定めていたといえる。

他にも必ずしも「國民住宅」を志向して設計されたものでない提案やル・コルビュジエ(Le Corbusier: 1887-1965)やゴットフリート・フェーダー(G. Feder: 1883-1941)，トーマス・アダムス(T. Adams:1871-1940)，ブルーノ・タウト(Bruno Taut:1880-1938)やワルター・グロピウス(Walter Gropius:1883-1969)らによる海外の事例引用も数多くみられ，西洋モダニズムの思想・手法を積極的に摂取せんとする姿勢が確認できる。

### 5.2 戸建住宅案

1941 年の建築学会主催競技設計に際して提案された内田の「國民住宅」案は，その敷地条件を「大都市の外周部或はその衛星都市に建築せらるるとの假定」[文18)]とする戸建住宅案であった。

提案された住宅の配置図，平面図，立面図の各計画および詳細図や透視図について，戦時の印刷物であり内容が不鮮明であることから，適宜内容を精査し，図面を再作成した。その図面を元に「國民住宅」案の建築ＣＡＤによる３次元復元を行った（**図 5-1**，**図 5-2**）。これらの資料をもとに，内田の提案した戸建住宅案にみられる「國民住宅」思想の特質を以下に整理する。

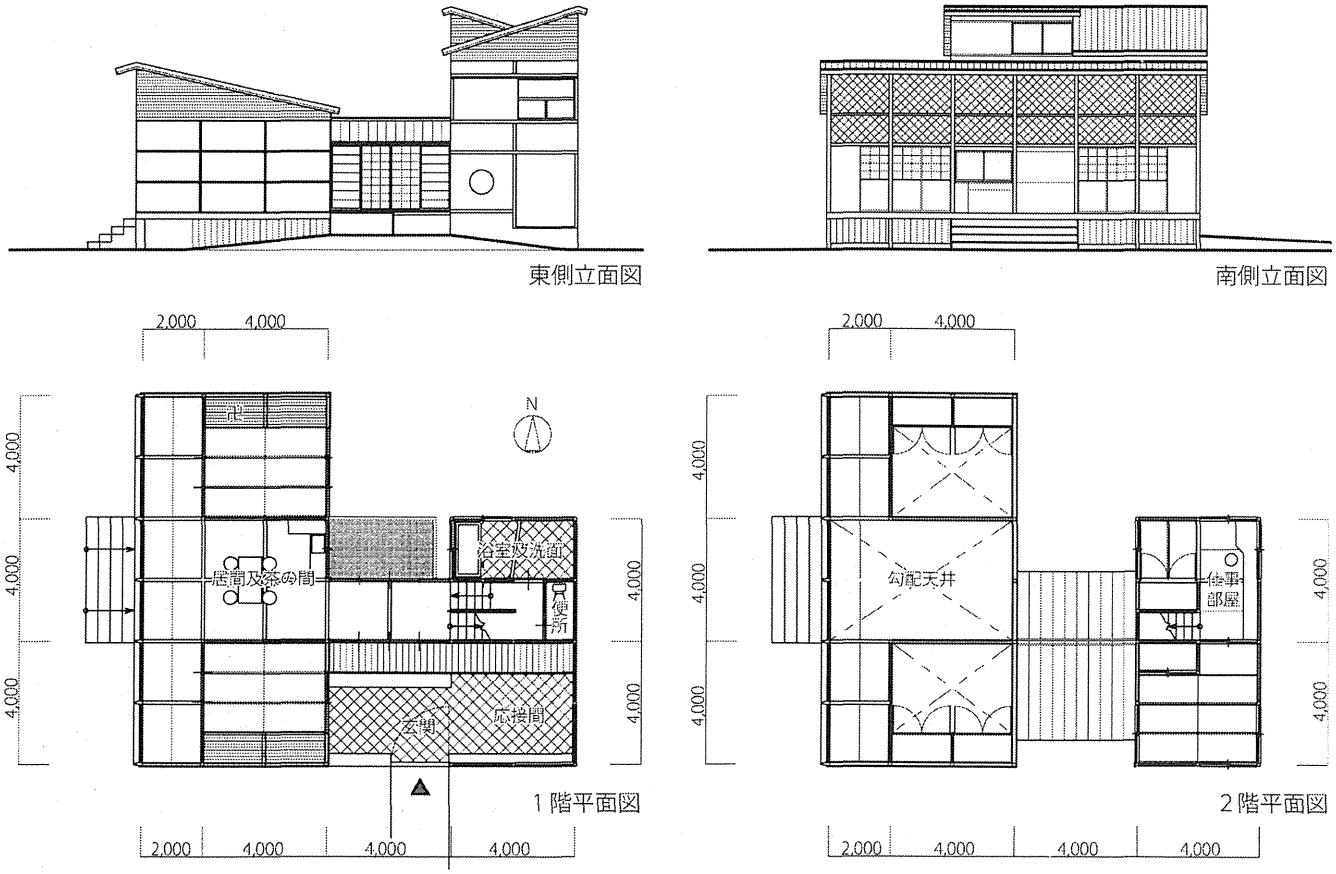


図 5-1 「國民住宅」案立面図および各階平面図

①構造は木造であるものの，その細部を検討すると，従来の木造住宅へ大きく改変を加えたものであることがわかる。詳細図は細部の記載内容が判然としないため確言はできないが，規格化された木材を組み合わせて柱や梁を構成している点が読み取られる。ファサードに林立する柱の断面は紡錘形に造形するため複雑な部材の組合せを図示している（図 5-3）。競技設計に入選した他の提案に比しても，従来の軸組とはおよそ懸け離れた提案であることが指摘できよう。

②住宅外観（図 5-4）は，なまこ壁をモチーフとしたラチス模様を基調とし，開口部には蔀戸を用いた日本趣味の傾向が読み取られる。瓦葺きを踏襲するものの純粋に日本式の意匠とせず，屋根をファサードとは反対方向に傾け陸屋根の表情へ近づける手法を採る（図 5-4）[注27]。

③平面計画の特色として，住戸内から台所を排し，「隣組」単位に共同の「炊事場」，「洗濯所」を設け，家事労働の共同化・合理化を図っている（図 5-1，図 5-5）。「どちらかと云へば疊式」を理想の起居様式としながらも，提案においては３室を畳敷きの和室とし，「居間及茶の間」と「應接間」を椅子座式としている（図 5-6）。論考にみられた新たな「疊式」への提案を採らず，従前の床坐式・椅子坐式併用を容認したといえる[注28]。

④建材には，防火材マグネシヤセメントと鉋屑とを主要成分とした合成板が使用され，その詳細が図示されている[注29]。内田は東京帝国大学大学院でマグネシヤセメントの耐火性能を研究しており，その成果の一端が計画案に反映されていることになる。また，大量生産に向けたメーター・モジュールによる規格化・合理化方法（図 5-5）の解説が附せられ，住宅平面は２m×２m を最小単位としたプランニングになっており，住宅地の中央に立地する「託兒所・集會所」に対しても２m グリッドが適用されていることが読み取れる。

建築の合理化志向の一方で，伝統を尊重しながらも，それを現代建築へ応用せんとする姿勢も随所にみられる。「祖先との精神的な連絡を計る」ことを意図し，家族統合の象徴としての家紋をあしらった意匠が玄関側の外壁に用られている（図 5-7）。仏壇を置くスペースが用意されているが，その下部にはガラスブロックを用い，モダンな印象とする操作が見受けられる。

このように内田の提案は，戦時に要請された「國民住宅」という枠組みのもとに，海外からのモダニズム建築の手法を受容・展開しつつ，日本の伝統的意匠を融合させていくことで，新しい日本の建築，日本主義的意匠の創出を企図したものと見なしうる。

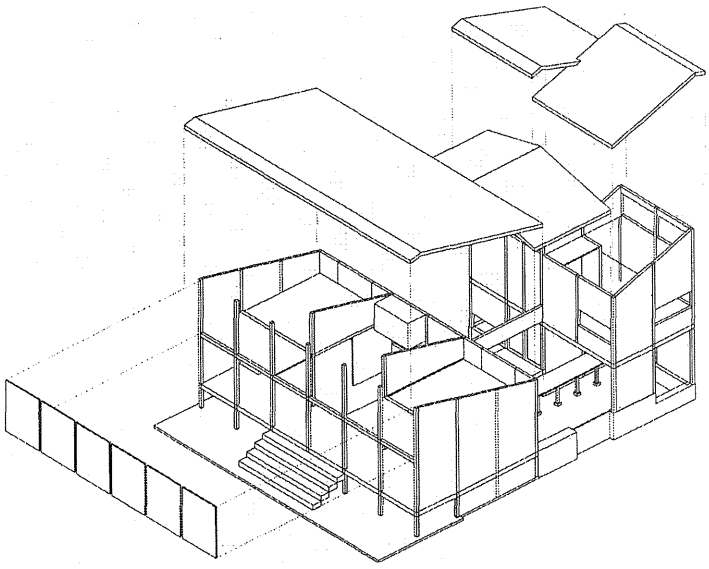

図 5-2　「國民住宅」案の３次元構成

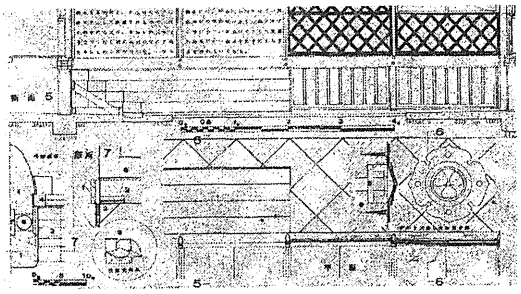

図 5-3　詳細図（部分）[文7]

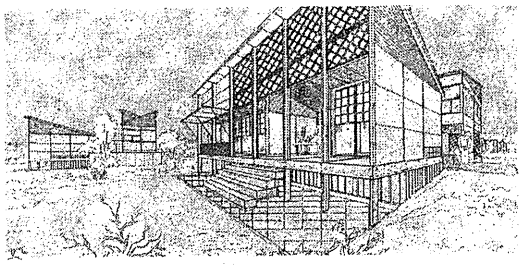

図 5-4　外観透視図[文7]

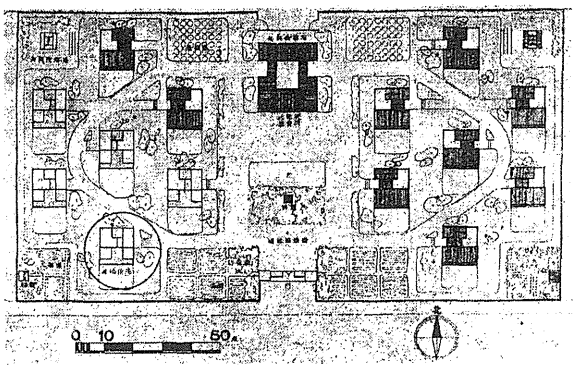


図 5-5　配置図[文7]

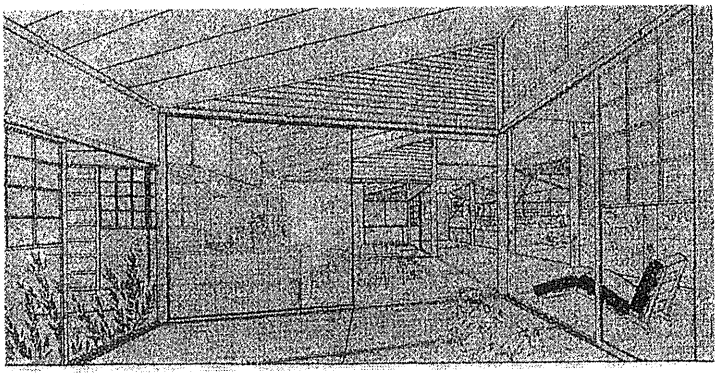

図 5-6　内観透視図[文7]

### 5.3　都市・国土計画への展開

内田の「國民住宅」関連論考には，自身の競技設計案のほか，「新しき都市」での提案も含め，都市計画および国土計画的視野による提言を行っている。それらの提言内容の概要は以下のようにまとめられる。

①掲載図版には，競技設計において提案された木造１戸建住宅とは異なる木造２戸建住宅，あるいは高層集合住宅案を提示している。先にみたように，内田は「國民住宅」を「表現されるものの形態は無数」とみなしており，都市中心部においては「鐵筋コンクリート造」の「高層連續住宅」が「國民住宅」として相応しいと考え提案したものといえる（図 5-8，図 5-9）。

②「國民住宅」を郊外から都市中心部へと至り計画する姿勢は，「都市計畫，地方計畫，そして國土計畫の方向から，住宅問題を考へる」視座に依拠するものであり，よって巨視的な範囲に及ぶ考察・提案がなされている。具体的には「國民學校區案」（図 5-10）を居住地計画の核とする基本方針として提示し，「家→隣組住區→購買住區→國民學校住區」で構成される同心円的図式に基づき計画している。

③こうした計画手法は，当時，建築学会などにより理論や事例が紹介されていた国土計画論や近隣住区論を援用したもので，提案はその具体化として示されている。しかし，翻案にあたり鎮守の森や神社を共同体の支柱とし，中央の「隣組廣場」に「國民學校」や「國旗掲揚所」等を配するなど（図 5-5），戦時の社会状況を多分に反映した内容となっている。

④よって，内田の「國民住宅」構想の都市計画的位置づけは，近代的・合理的な計画手法に依拠した居住地計画としながらも，居住者の内面から発せられる精神を基盤とし，それを国家の存立根拠とする極めて精神的な体系を持つものとして想定されている。

### 6.　おわりに

内田祥文の「國民住宅」構想は，「國民」に相応しい住居として日本的な起居様式や伝統的意匠・構法を肯定的に捉える姿勢が随所に見出される。しかし，その基底には国内外における先進のモダニズム建築や都市計画の語法を援用し，それらの融合・昇華を試行せんとする姿勢が看取される。こうした傾向は単純な日本主義とは一線を画すものであり，従来指摘されるような「國民住宅」の復古的・反動的性格とは異なるものと指摘できる。

これは，戦時期においてもなお「日本的なもの」を志向する精神がモダニズムの手法により表現されることが相反した事態とは認識されず，むしろ生活革新の契機として試行されたことを示唆するものとも考えられる。換言すれば，内田の構想が日本回帰への短絡，あるいはナショナリズムの発露としてではなく，逼塞する近代の社

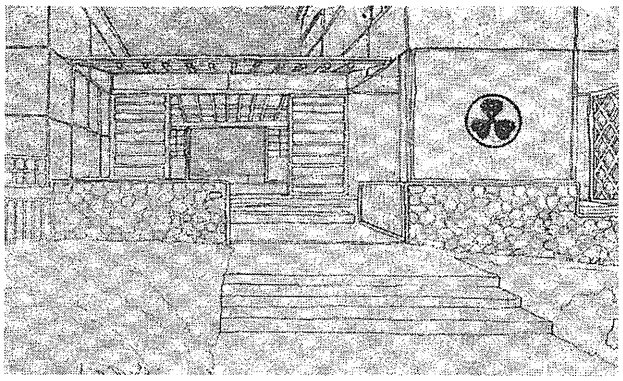

図 5-7　アプローチ部分[文7)]

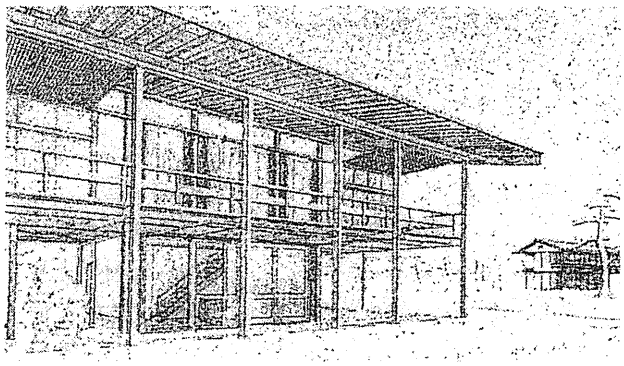

図 5-8　谷内田二郎「國民住宅試案」[文6)]

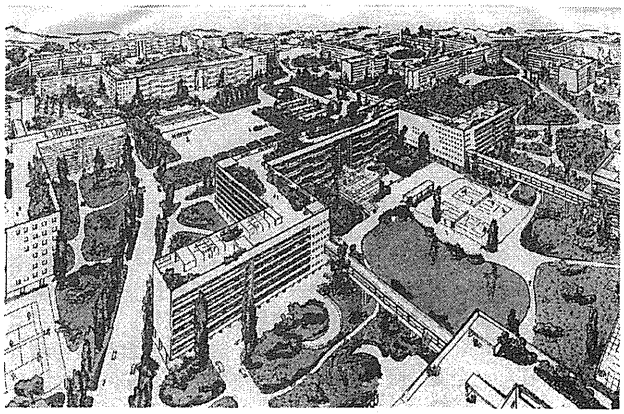

図 5-9　内田祥文ほか「新しき都市」鳥瞰図[文9)]

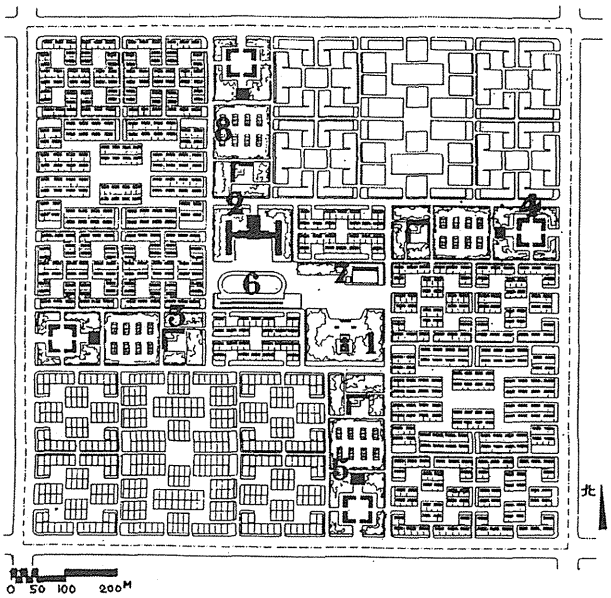


図 5-10　國民学校区[文5)]

会的・思想的状況の打開を模索する過程において復古的・反動的性格を胚胎したとも読み取られる。

内田の「國民住宅」構想は，詳細かつ鮮明に「近代的であること」と「日本的であること」の両立へ向かう意志が見出された。しかし，論考に見受けられた先鋭的・革新的な思想が計画案へ十全に反映されていたわけではなく，提案に伴い皮相な伝統主義や民芸趣味への偏向が表面化したことも否めない。モダンと伝統の融合を志向する理念が具象化に際して安易に国粋主義あるいは体制賛美へと帰結する危うさが孕まれる構図を，個々の事例として具体的に示している点に内田の構想が持つ歴史的重要性があるものと評価できる。

以上，内田祥文の「國民住宅」構想を設計提案と論考の両面から読解・考察してきた。前述のように，ここでみた構想は，内田祥三や高山英華らと連名のもとに計画した大同都邑計画(1938)や，東京都市改造計画「新しき都市」(1941)等の計画を包摂・展開したことからも，それら計画への考察も要されよう。また今回は触れることができなかった大部の論考「建築集團の一体的考察」(1943)が「國民住宅研究」といかなる関連性をもつか，そして，戦後とりまとめた論考「理想都市」(1947)が古代から現代に至る理想都市の系譜をとりまとめた意味の解明なども視野に入れ，より考察を深化させていくことが今後の課題である。

＜注＞

1) 「國民住宅」に言及するもの主だった著書・論文に次のものがある。①西山夘三：すまい考今学 現代日本住宅史，勁草書房，1989 および，西山：戦争と住宅生活空間の探究（下），勁草書房，1983，西山：日本のすまいⅡ，勁草書房，1973。西山は，自身が「國民住宅」全盛の時代にいわば当事者として提言・提案してきた経験から多くの記述を行い，住宅史における位置づけを詳細に綴っている。②八束はじめ：思想としての日本近代建築，岩波書店，2005。日本近代建築と哲学思想との連関の上に，総力戦下の住宅建築を考究している。八束も内田祥文へ言及するが，考察は「國民住宅に就て」のみ。③内田雄造：庶民住宅の研究，および，鈴木成文：国民住宅の研究，近代日本建築学発達史，丸善，1972，pp1260～1264。「國民住宅」に関する研究内容を整理している。西山夘三の業績を高く評価するものの，その他の「國民住宅」提案・提言については「一部の人々は便乗的に伝統礼賛や質実剛健の生活を称揚したが，また一方で，一部知識人や官僚を中心とする人々は，権力による建設と統制を通じて国民生活の向上を試みるという姿勢をとった」ものの，「結果的には，ファシズムに組み込まれてしまうこととなる」と評している。また内田祥文の提案については，「当時の状況の下では非論理的な和風住宅讃美論と短絡して，室空間の転用性に基づく住宅水準の切り下げを容認してしまう危険もあったと思われる」と指摘する。④布野修司：布野修司建築論集Ⅱ，彰国社，1998，同：国民住宅と西山夘三の食寝分離論，図説・日本の「間取り」，pp.80-83，建築資料研究社，2001。布野は当時の國民住宅を概説し，そこでの議論を「戦時下の状況に眼をつむって理想を語るための道具」としながらも，西山の「食寝分離論」は，戦後日本を主導した「型による解決」として高く評価している。内田案については「このコンペの当選案は，一見して奇妙である。そして中途半端である。木造に国際様式をはりつけただけなのである」と酷評している。

2) 内田祥文に関する研究は未だ充分な蓄積がなされておらず，以下に挙げる研究において各々の考察の過程で内田の業績についても触れている程度である。①中島直人：日本近代都市計画における都市像の探求，都市計画，No.265，日本都市計画学会，2007，pp.11-16。日本近代における都市像の一例として大同都邑計画や内田らによる東京都市計画構想「新しき都市」について言及し都市像としての前衛性は評価しつつも，実現可能性の低さには苦言を呈している。②日笠端 『コミュニティの空間計画 市町村の都市計画１』，共立出版，1997。日笠は日本におけるコミュニティ計画の系譜について言及するなかで「新しき都市」に触れ，「当時は戦争たけなわの時期であったが，単に防空的見地だけからではなく，長期的展望にたって東京の改造計画を立案したもので，当時の若い建築家の理想都市像を知る上で今日でも価値ある提案である。」と評価している。③豊川斎赫 「丹下研究室における住宅経済論：総力戦下の再生産と標準生計費」，日本建築学会計画系論文集，No.609，日本建築学会，2006.11，pp.171-177。豊川は丹下研究室での研究の系譜を記述しながら，内田の「國民住宅」構想にも言及している。

3) 内田の経歴については以下を参照。文２）掲載の略年譜(pp265～266)のほか，内田祥三先生眉寿祝賀記念作品集刊行会編：内田祥三先生作品集，鹿島研究所出版会，1969 を参考とした。

4) 防火建築研究に関する研究論文としては，内田祥文：木造家屋外周の防火に關する實驗的研究（原稿）学位論文，東京都公文書館・内田祥三文庫，請求番号 U524.94-う-4274，1942～1945 のほか，内田祥文：燒夷彈に對する都市防火對策の一研究，建築学会論文集，No.11，pp31～36，建築学会，1938 や内田：家屋外周の防火に關する研究，建築雑誌，Vol.54 No.665，pp629～638，建築学会，1940 など多数。共著に「月島火災實驗に於ける燃燒熱量と火災状況」，建築学会論文集，No.13，建築学会，1939.4，pp437～446（岸田日出刀，高山英華，關野克），「木造密集衢に於ける復興計畫作成要綱」，建築学会委員会資料，1942.10（浜田稔）などがある。

5) これら提案は次に収録されている。建築学会：青年道場懸賞競技設計當選圖案，建築雑誌，Vol.52 No.645，1938.12，pp1393～1398，同：家族向アパートメント・ハウス懸賞競技設計當選圖案，建築雑誌，Vol.54 No.668，1940.11，pp909～917，同：勞務者向集團住宅地計画懸賞競技設計當選圖案，建築雑誌，Vol.53 No.657，1939.12，pp1425～1433，同：國民住宅懸賞競技設計當選圖案，建築雑誌，Vol.55 No.689，1941.11，pp906～919。「深川中小工業地区」および「新宿歓興地区」の両計画案については，以下に詳細が掲載されている。市川清志：帝都復興計画・新宿地区，復興情報，戦災復興院，1946.8 および，市川：帝都復興計画・深川中小工業区，復興情報，戦災復興院，1946.10。こうした設計提案のほか，前掲書，内田祥三先生作品集には，勝田工業都市計画，日立多賀の住宅地計画についても内田祥三のもとで祥文が設計・図面作成を行ったことが記されている（pp174～177）。

6) 内田祥三，高山英華，内田祥文：大同都市計畫案，現代建築，No.8，pp36～48，現代建築社，1940.01 および，高山英華：大同都邑計畫覺書，現代建築，No.4，pp48～57，現代建築社，1939.09，内田祥三：大同の都市計畫案に就て（１），建築雑誌，Vol.53 No.656，

pp1281～1294，建築学会，1939.11，同：大同の都市計畫案に就て（２），建築雑誌，Vol.53 No.657，pp1354～1368，建築学会，1939.12参照。

7) 高山英華：都市の領域，建築家会館，p.55。また，伊藤ていじは「丹下健三先生は構想力，内田祥文先生は美的感性に優れていたという感じ。このお二人は，建築デザインの天才」と評している。伊藤ていじ：戦後建築史家の軌跡，建築史学，No.42，pp104～134，建築史学会，2004.3。

8) 内田祥文：建築と学校製図，私家版，1942.4 および内田：構造計算概要，私家版，1942.10（東京都公文書館・内田祥三文庫，請求番号 U525.1-け-2639）

9) その他の評論として，内田：アジアの造形，新建築，Vol.15 No.10，pp472～478，新建築社，1939.10 や内田：天壇－美しき日々の回想－，建築と社会，Vol.25 No.2，pp39～40,47，日本建築協会，1942.2，内田：大地の歌，建築と社会，Vol.25 No.9，pp24～27，日本建築協会，1942.9，内田：紀行・原子爆弾被害調査行，科學画報，Vol.35 No.1，pp23～27，誠文堂新光社，1946。なお，以下は出典未確認。内田：ピカソとコルビュジェとストラビンスキー，一年生諸君の為に，東京都公文書館・内田祥三文庫，請求番号 U280-う-2642，1938 などがある。全 177 頁におよぶ未刊行論考として，内田：建築集團の一体的計画－その構想力涵養への序論として，東京都公文書館・内田祥三文庫，請求番号 U520.7-う-3236，1943.11 がある。

10) 日本生活科学会・國民標準住宅に関する分科会での研究活動については，日本生活科学会：生活科学会標準住宅 其１，東京都公文書館・内田祥三文庫，請求番号 U527.1-う-3758，1942 のほか，山森芳郎：生活科学論の 20 世紀，家政教育社，p112，2005 を参照。

11) 内田の没後に以下の報告書が出された。渡邊要，内田祥文：標準住宅に關する研究（第１報）都市型住宅，日本学術振興会第 26 特別委員会報告，1947.2

12) 「國民住宅」のほか「國民住居」，「庶民住宅」と称されることもあり，論者により語句の使い分けも含め定見はない。なお，建築学会編：住宅用語集，建築学会，1943.5 には，「國民住居」を「國民服，國民食の類似概念として國民の住むべき標準的住居を謂う。ドイツの Volkswohnung は國民住居と譯されてゐるが，之はこゝにいふ國民住居とは異なる」としている。「國民住宅」という呼称は戦時期に限定されず，敗戦直後においても「國民住居の再建計畫」（新建築，Vol.21 No.1，新建築社，1946.1），「12 坪木造國民住宅集」（新建築，Vol.23 No.4，新建築社，1948.4），「15 坪國民住宅懸賞競技」（新建築，Vol.23 No.11-12，新建築社，1948.11）などがあり，「國民住宅」という用語自体は戦時体制とは過分であった。また，出口王仁三郎(1878～1948)の「大正維新に就て」（神霊界，No.45 Vol.1，大日本修斎会，1917.3)には「次に國民住宅の根本義は，／各人其家族の多寡に應じて造る事／氣候風土に適す可き事／其職務に適す可き事／天産自給に於ける國民住宅の根本義は，全國民一人の徒食遊民の絶無なるをもつて基礎となすべきものである。是れ即ち國家的大家族制度の實現せらるべき所以である。統一的國民の住宅は，天産自給の國家經濟を充實圓滿ならしむるのが大主眼である」(p99)とあり，用例は大正期にまで遡及できる。

13) 当時，提案・提言された「國民住宅」あるいは「國民住居」，「庶民住宅」に関する主だったものとして次のものが挙げられる。各種機関，団体によるものとして，厚生省：住宅及其ノ敷地設計基準，厚生省，1941，厚生行政調査会：住宅問題の解決，高山書院，1941，建築学会住宅問題委員会：庶民住宅の技術的研究，建築雑誌，Vol.55 No.671，pp73～101，建築学会，1941.2，住宅文化研究会：家を建てる前に・國民住宅編，住宅文化研究会，1942。個人による著作に，宍戸修：戦ふ國民住宅，聖書房，1943，宇賀神行一：國民住居の話，共立書房，1941，西山夘三：國民住居論攷，伊藤書店，1944，同：住宅問題，相模書房，1942 などがある。その他に，早川文夫：國民住居の提唱，建築雑誌，Vol.55 No.666，pp1～5，建築学会，1940，石田嘉平：『國民住宅』の提案，住宅，Vol.25 No.12，pp167～170，住宅改良会，1940.12，高山英華：國民住居の標準，建築と社会，Vol.23 No.6，pp48～52，日本建築協会，1940.6

14) 審査結果は建築雑誌，Vol.55 No.680，pp903～919，建築学会，1941.11 に掲載。応募作品は内田祥文と谷内田二郎の共同設計。なお，谷内田は本案とは別に単独名義で一案応募・入選している。なお，審査員・市浦健による審査評「國民住宅設計案審査所感」が同号(p903～905)に掲載されており，翌月号には，森田茂介：學會の「國民住宅」設計競技に關聯して，および西山夘三：創意のあり方について，が所見感想として掲載されている（建築雑誌，Vol.55 No.681，pp981～984，建築学会，1941.12）。

15) 「國民住宅」の概念定義は、特に文７），文８）に掲載されているものであるが、文４）においてもそれを総括・論述されている。

16) 二項対立の克服という図式は，当時の哲学思想，例えば三木清の「東亜新秩序論」や，座談会「近代の超克」の議論との高い類似性を見出すことができる。廣松渉は三木の東亜共同体論について次のように指摘している。「彼の構想する東亜共同体の思想原理は，既成のイズムの排却ないし止揚において措定される。彼としては「民族主義」「全体主義」「家族主義」「共産主義」「自由主義」さらには「国際主義」「三民主義」「日本主義」について逐次検討していき，これらをいかに弁証法的に止揚するかを説いてみせる」ものの，「所詮は志向性の表明にとどまっており，およそ哲学体系としての実質を備えていない。これは，もとより，三木哲学一個の破綻を示すものという域を超えて―三木がかの『文学界』の有力な同人であった事実を想起されたい！―戦時下日本の「近代超克論」の総体に関わる一事実である」（廣松：〈近代の超克〉論 昭和思想史への一視角，pp144～147，講談社，1989）。

17) 同心円的図式については丸山真男：現代政治の思想と行動・増補版，未来社，1964 および、藤田省三：天皇制国家の支配原理，みすず書房，1966 を参照。

18) 文献９）。内田は「我々は、我國古代の氏族制度や、或は我國農村の世界に關し、新しく注目する必要がある」と述べ、西田直二郎や鈴木榮太郎の著作を引用・言及している。

19) これに続いて「我國の過去に於ける建築の精神―木構造と意匠との不可分の連結等は、他の異つた材料を使用する場合、必然的に其の構造材に最も適した構造方法を其の意匠の上にもとらせる事を教えるもので、夫はとりも直さず未來に向つて過去を打ち破つて行く無限に自由は發展と、我國の傳統精神との完全な結合を示すものであると云へよう」と言明しており、いわゆる帝冠様式とは異なる志向性を読み取ることができる。

20) 文４）にて内田は「勿論、生活の活動的方面から見れば、現在の疊式は椅子式に比して甚だしく不便であり、又非効率的である事は明で、食事、或は仕事等を行ふには椅子式の生活が當然とり入れられるべきである」としながらも、「椅子式生活を行ふには、仕事、或は食事等に使用される椅子の外に、休養の爲の椅子―ふかぶかと體をうづめる椅子とか、或は充分のスプリングの活用せられた寝椅子、或は寝臺の類が絶對に必要であるが、之の使用に關しては、我國に於ては相當問

題の點が多いと思はれる。そして所謂椅子式生活と云ふのは、其の窮極に於て、靴ばきで室内に入ると云ふ所に迄至らねば充分其の活用をみられぬもので、此の事は、我國の風土の上のみから考へても、それを其のまま使用するわけには行かぬであらう」としている。

21) 建築・都市計画分野の引用文献は，ゴットフリート・フェーダーやル・コルビュジエ，トーマス・アダムスなどの著作・作品集が挙げられており，国内の建築理論書よりも海外（ドイツ，フランス，アメリカ等）のものが多くを占める傾向がみられる。

22) 建築分野以外の著作引用は次の 11 冊。①高山岩男：文化類型學研究，弘文堂書房，1941，②柳田謙十郎：日本精神と世界精神，弘文堂書房，1939，③ウィットフォーゲル：東洋的社會の理論，日本評論社，1939，④西村精一：五人組制度新論，岩波書店，1938，⑤和辻哲郎：風土・人間學的考察，岩波書店，1935，⑥西田直二郎：日本文化史序説，改造社，1932，⑦鈴木榮太郎：日本農村社會學原理，時潮社，1941，⑧文部省：戰時家庭教育指導要項，文部省，1942，⑨難波田春夫：國家と經濟 第１巻，日本評論社，1938，⑩難波田春夫：國家と經濟 第３巻，日本評論社，1939，⑪作田荘一：國家論，弘文堂書房，1940。

23) 日本古来の伝統社会に移入された西洋文明といかなる共存関係を構築するかという問題について，内田は文６）の「或る寓話に捧ぐる誅」と題した物語に沿って言及しており興味深い。

24) 彦谷邦一は戦時中に「和辻哲郎の“風土”が出版され田辺元の“歴史的現実”とか西田幾多郎の“日本文化の問題”などにわからないままに心を奪われ」ていたことを告白している（彦谷：私の受けた建築教育，建築雑誌，Vol.91 No.1106，p431，建築学会，1976.4）。また，浜口隆一は「丁度難波田春夫という人の「国家と経済」という物凄く右翼ばりの本が出ていたりした頃で私自身も国民建築様式という神がかりのようなものを書いて」と述懐している（創立 70 周年記念座談会・デザイン，建築雑誌，Vol.71 No.833，p11，建築学会，1956.4）。これらからも内田の文献引用にみられる思想傾向は当時の青年建築家，学生らにもある程度共通したものであったものと考えられる。

25) 「國民住宅」は「充分の土地と、充分の日光と、充分の空氣とを共有出来る、充分の敷地を持つ１戸建であらねばならぬ」としながらも、総合的見地より「都市の中心部に於いては、地價の問題、防空防火の問題、耐震性より考へ、鐵筋（鐵骨）コンクリート造を以て代表せられる所の高層連續住宅」が適当としている（文 10），pp5～6）。こうした「國民住宅」の様式に対する柔軟な姿勢は次のような言明にも端的に表れている。「即ち例へば、氣候、風土に對する住宅の配備は、其の土地の地方性を充分考慮して行ふべきであり、如何に科學が進歩しても大東亞共榮圏内のあらゆる部分に同一形式の住宅を建築して、室内の溫濕度をエアー、コンディシヨニング等に依り最も快感的にすると云う如き文明的方法は全面的に採らるべきではなかろう」（文８），pp101～102）。

26) 「近代の超克」は日米戦勃発直後の 1942 年に開かれた雑誌『文学界』主催シンポジウムとして各界の知識人が参加し，逼塞する日本の近代をいかに乗り越えるかを議論した（1942 年 9～10 月号，座談会は７月。座談会の詳細については河上徹太郎ほか：近代の超克知的協力会議，創元社，1943 を参照）。同年に内田は文９）にて「凡ゆる點に於て近代の事實が新しく考慮せられねばならぬ今日」と論じており，これが時代の空気であったことを窺わせる。「近代の超克」が当時の建築界に通底する思想内容を有するものと指摘した主たる論考として先に挙げた八束はじめのほか，中谷礼仁：国学・明治・建築家，一季出版，1993 がある。

27) 八束はじめは，ラチス模様の外壁や逆勾配の屋根について，前者を坂倉準三の「パリ万国博覧会日本館(1937)」，後者を丹下健三が前川事務所で担当した「岸記念体育館(1941)」と類似することを指摘し，当時の流行であったことを論じている（八束：思想としての日本近代建築，岩波書店，2005，pp477～478）。しかし，図 5-4 からも見て取れるように，岸記念体育館との類似性は屋根に関する限り，どちらかといえば競技設計に提案された谷内田二郎単独の提案のほうが高い類似性を示している。

28) 競技設計案に可動式畳の提案はみられないが，内田が伊藤喜三郎と連名で提案した建築学会主催競技設計「家族向けアパートメントハウス計画」応募案(1940)では可動畳がみられる（建築雑誌，Vol.54 No.668，p914，建築学会，1940.11）。この提案が「國民住宅」競技設計の前年にあたることからも，内田は何らかの意図でもって可動畳を推奨しながらも，「大都市の外周部或いはその衛星都市」に立地する住宅では導入しなかったものと思われる。

29) 内田祥文：防火材料としてのマグネシヤセメント板に關する研究（其 1 MgO－鋸屑－砂三成分の諸性質），日本建築学会論文集，No.27，pp73～79，建築学会，1942.11 および，内田：防火材料としてのマグネシヤセメント板に關する研究（其 2 苦汁液の濃度差による諸性質），同前，No.29，pp329～335，建築学会，1943.5 を参照。

## ＜参考文献＞


1) 内田祥文：建築と火災，相模書房，1942.12
2) 内田祥文：建築と火災（改訂版），相模書房，1953.3
3) 内田祥文ほか：新建築，新しき都市特集號，Vol.17 No.４，新建築社，1941.4
4) 内田祥文：國民住宅に就いて，建築雑誌，Vol.56 No.683，pp60～66，建築学会，1942.2
5) 内田祥文：庶民住宅覺書，住宅，Vol.26 No.８，pp45～50，住宅改良会，1941.8
6) 内田祥文：國民住宅研究１，住宅，Vol.27 No.１，住宅改良会，pp14～17，1942.1
7) 内田祥文：國民住宅研究２，住宅，Vol.27 No.２，pp43～48，住宅改良会，1942.2
8) 内田祥文：國民住宅研究 ３，住宅，Vol.27 No.４，pp101～106，住宅改良会，1942.4
9) 内田祥文：國民住宅研究４，住宅，Vol.27 No.５，pp145～150，住宅改良会，1942.5
10) 内田祥文：國民住宅研究５，住宅，Vol.27 No.７，pp1～9，住宅改良会，1942.7
11) 内田祥文：國民住宅研究６，住宅，Vol.27 No.８，pp63～71，住宅改良会，1942.8
12) 内田祥文：國民住宅研究７，住宅，Vol.27 No.９，pp117～125，住宅改良会，1942.9
13) 内田祥文：國民住宅研究８，住宅，Vol.28 No.３，pp85～92，住宅改良会，1943.3
14) 内田祥文：國民住宅研究９，住宅，Vol.28 No.４，pp125～130,141，住宅改良会，1943.4
15) 内田祥文：勞務者向集團住宅地計畫に就いて，都市公論，Vol.23 No.３，pp62～78，都市研究会，1940.3
16) 日本建築文化連盟編：計画 planning 建築文化の基本的問題，相模書房，1947
17) 建築学会住宅問題委員会：庶民住宅の技術的研究，建築雑誌，Vol.55 No.671，pp73～101，建築学会，1941.2
18) 建築学会：第 15 回建築展覧會規程，建築雑誌，Vol.55 No.675，p2，建築学会，1941.6